利する経済政策を大衆諸セクターと妥協することなく自由に決定できるようにする、そういう目的をもった資本主義的発展の論理的帰結である（p.50）。PRIは資本による階級支配の用具として生れた。一言でいえば党は資本の下僕である。"階級的連帯さえ喪失させるべく労働者は他の階級、セクターと混合させられた"（p.50）。労働者とその分派が連帯意識をもった一つの階級として存在すれば、すでにすゝめられていた資本主義的発展が危殆にひんするであろうから。そのうえPRIは"贈収賄・公金横領による腐敗と蓄財が一般化するなかで、抑圧と利益供与を使い分け労働者・農民を服従させた"（p.51）。実際そう考えないとメキシコがかくも長期にわたって経験してきた経済成長を説明することは困難である。労働者・大衆の要求をおさえこむ抑圧者としてのPRIなくして「安定経済成長」はありえなかったであろう。再分配の必要性を知りながらもそれにきわめて冷淡な権威主義的・専制的国家体制なくしてもやはりそれは困難であったろう。

ゴンザレス・カサノバのいうように、"労働運動をも含む全ての政治闘争を管理しうる国家体制がつくりあげられてきた"（p.51）。反対意見を許容するのは体制自身がそれを育成したばあいに限られ、体制の枠からはみだすものは抑圧してきたのである。ゴンザレス・カサノバの研究に導かれ次のように結論してこの論稿を終えよう。今日メキシコの政治システムは自らの改革に努力している。もしこれが抑圧を低め差別や政治的ごまかしを払拭し民主主義的傾向を拡大することであるのなら、それを肯定的に解釈することができる。しかし、そのばあいでも、PRIの責任であるにせよないにせよとにかく今日までメキシコが経験しえなかった民主主義的で誇りのある国民生活にむけての第一歩であり、決して最後の歩みではない。

(Lorenzo Meyer, ''Del optimismo a la duda: el PRI visto por los norteamericanos'', José Luis Reyna, ''Desde dentro y desde Fuera : el PRI visto por los mexicanos'', Nexos. no. 17, marzo 1979. © L. Meyer y J. Luis Reyna)

らゆるレベルの選挙操作がなされている〃（pp. 70—71）。このように党がきわめて集権的な機関であって、国民生活のすみずみまで影響力を浸透させ（p. 66）、しかもそのコントロール機能は対立意見の存在を■難なものにするほど強力なものだとすると、当然〃メキシコには自由な批判的意見はない〃ことになる（p. 76）。民主主義とは全く異質な状態が強調されるわけである。

しかし、モレノはこの国が直面している状況——それはかの政治団体が逢着している困難な局面でもあるが——から脱出する方策をも提示している。〃二大政党制あるいは複数政党制への道〃（p. 117）がそれである。経■成長と並行して社会全体が発展するためには、経済成長と同時に〃多元的民主主義〃をつくりあげなければならない。モレノ・サンチェスがそう主張した時、現在の政治改革はすでに緒についていたのだろうか。

**〃中産階級の党か党内の中産階級か？〃**　ベルタ・レルネルの論文は充分な資料に基づいた真摯な研究である。しかし、「公党」の発■は中産階級の参加が拡大した結果であるという議論のたてかたには同意できない。このような議論の進め方から、当然、党は中産階級各セクターを中心に構成されたものであるという解釈が出てくる。中産各セクターは利害調整の機能を——著者によれば、充分に——果しており（p. 51）、各セクターからなる党もまた——とくに党のリーダーが中産階級に支持基盤を■いていることを考えれば——同じ機能を果していると考えてよい（p. 55）というわけである。著者自身の言葉でいえば、〃党の発展過程は中産階級が拡大して権力に接近しえ、他の階級との利害調整をなしえていることを示している〃（p. 58）。中産階級の利益を代表するのが全国一般組織連合——党内の一般セクター——であり（p. 78）、これを母体に当選する議員の数は他の二つのセクターである農民セクター、労働者セクターからの議員の合計を上回っている事実から、一般セクターは他の二つに比べて相対的優位にたっていると考える（p. 80）。

レルネルはまた、党が〃新有権者にたいする絶えざるよびかけを行なって効果をあげ、選挙参加を増大させた〃ことから、代表選出システムにおいても党はよく機能してきたとする（pp. 84, 85）。選挙参加の拡大がＰＲＩへの投票とむすびついていることはこれまでにも多くの研究者が示してきており、この点では著者の判断に根拠がある。しかし、中産階級そのものの参加拡大がＰＲＩに有利に働くという著者の一般命題に関しては否定的傾向がみえる。たとえば、これも多くの研究が立証するところだが、ＰＲＩへの投票は都市よりも農村において多い。逆に反対政党の存在を支えているのが都市票なのである。〃中産階級〃が基本的には都市化によって生みだされることを考えれば、レルネルの議論にそって中産階級が〃政府の党〃を支えているとはいえなくなる。

〃中流〃の社会勢力から成りたっている党は〃メキシコの政治構造における主たる安定要因、統合要因〃であって、各セクターの要求を代表し伝達する役割を効果的に果してきており、〃社会的緊張をときほぐす要因〃となっている（p. 93）、そうレルネルは考えている。結局のところ一つのユートピア的見解である。

**〃ＰＲＩと階級支配〃**　ゴンザレス・カサノバの論文はメキシコにおける国家と政党との関係を扱った研究の中でもっとも完ぺきなものであろう。政治的基盤を見出しえぬまま進められてきた資本主義的発展の問題点をまとめあげようと意図し、それに成功している。彼の分析視■からすれば、党がＰＲＭからＰＲＩに変遷をとげた理由は明らかである。すなわち、この変化は、労働者、大衆の力を弱め、それにかえて党の中央機関を強化し、資本に

の特質は各セクター間の継続的な意見調整を困難にしているが、その反面、重要な問題については各セクターが中心となって充分な動員を行なうことを可能にしている（p.85）。そこに〝あまねく知られた〟党の動員機能をみるのである。更に、党全体がきわめて厳格な階層体系をなしていることを指摘し、下部から中堅層、幹部まで各レベルの〝党員の意見をざっと調べただけでも〟次の事実がみてとれるという。すなわち、〝党員の全てがそれぞれの地位に付随する権威に服することを了解しており、このヒラエラルキーが最終的には〝党の最高メンバーである〟大統領につながっていることを承知している〟（pp.110—111）。

エスクルディアはPRIと〝公権力〟との間の関係を選挙時の候補者指名問題にからめて議論しているが、結局彼の見るところでは〝党のリーダーのなんびともこの間のメカニズム、すなわちその公権力の真の源泉を説明することはできないであろう〟（p.142）。こうして前述した〝小数法則〟は、党の最重要機能の一つがいかにはたらくかを考えたばあいもあてはまるわけである。われわれはこの論稿の最初に挙げた問題から逃れられない。

**〝体制内からの体制批判〟**モレノ・サンチェスの著者は現代メキシコの政治システムを批判的に分析した最初の研究の一つである。彼がロペス・マテオス政府の高官であったことを考えれば、その批判は出版当時一層きわだって見えたにちがいない。〝内〟に居た人物が〝外〟に向けて書いたものだといえよう。

〝メキシコ社会に潜む深刻な危機が一挙に表面化した〟年、一九六八年の熱狂のさなか、モレノは、メキシコを支配する政党とそのもとでの政治システムが革命後五〇年以上を経てなお切迫した課題を解決しえていないことを詰問した。彼が提起した議論は〝民主主義とは発展の産物ではありえず、逆に発展のための条件である〟（p.37）というものであった。経済的民主主義（una democracia económica）の不存在が〝権威主義的・非民主主義的実践にみちた政治的環境〟（p.15）と合わさって国民生活の発展に制約を課していることを強調する。PRIこそこの制約の根源であり、象徴である。党は権力の頂上から操作される機械装置にすぎず、遠い将来はいざしらず、現在のところ発展の主たる阻害要因となっている（p.15）。また通説とは逆に、党は政治的安定を促進してはいないと主張し、その証拠として政治システムが危殆にひんした一九六八年のケースを挙げる（pp.38—39）。党が政治的安定を保証するものでないことはメキシコ政治システムにおける権力集中の当然の結果である。そしてこの〝政治団体〟PRIの機構自体が権力集中の最適例である（p.45）。PRIは大統領に従属する機関にすぎない。大統領に盲目的に服従していればいいのだから、〝党の名目上の指導者がイデオログである必要もないし、知的・道徳的・政治的能力をもつ人物である必要もない〟（p.52）。党に〝独自の識見をもつ〟指導者がでないのは当然であろう。党の唯一の機能は服従であり、唯一の価値基準は規律である。

選挙についても〝投票さえその効能を失ってきた〟という（p.60）。その威信の主要源泉であった選挙戦においても党は正当性を失ってきたとするのである。

ここで次のように問いうる。それでは何故党はこれまで生き残ってきたのか？　モレノの回答は明確である。〝メキシコにおける実質上の単一政党制は重大な偽装の下に維持されている〟（p.70）。その偽装の一つが、この国には複数政党があると絶えまなく宣伝工作することである。実際にあるのは〝民主主義の仮面をかぶったシステムでしかなく、それを支えているのが「唯一の政党」としての役割を担う政府の政治団体であり、これを通してあ

（注）この著作の改訂版が“El partido del Estado”として Nexos の本号に掲載されている。

**〝PRIが変ったのか、著者の見解が変ったのか――フエンテス・ディアスのばあい〟**　フェンテス・ディアスの書物には二版ある。初版は一九五六年のものであるが、十三年後に内容を一新した改訂版が出された。初版では、長年にわたって権威を失墜させてきたPRMは一九四六年はじめ〝すでに進められていた大統領■（ミゲル・アレマンの）に対応できる新しい組織としてPRIに生れかわらざるをえなかったと言い切っている。PRIは当然PRMの延長線上にあるのだが、他方では、大衆的基盤を欠いた官僚主義、硬直性というPRMの欠陥――そのために国家のたんなる選挙機■になってしまっている――を除去し、党を蘇生させることも必要であった（p. 72）と「党」の変遷を説明する。しかし、PRIが一九四六年の大統領選挙戦で大きな役割を果したとは考えていない。大統領アビラ・カマーチョ（Avila Camacho）がアレマン（Miguel Alemán）を次期大統領候補として認めたことの方が党が〝■得しえたかもしれない国民の支持〟よりも重要であったとしている（p. 73）。大統領の個人的権威の方が党が展開しえたかもしれない活動よりも重要であったと考えるのであろう。さらにPRIの登場は〝決して政治的発展を示すものではなく、むしろ一党支配の政治システムが歴史的にはいまだ確立されていなかったことを示している〟という（p. 74）。〔著者は、単一の組織が――このばあいはもちろん「公党」が――政治権力を独占するような状態を容認せず、かりにそのような組織の存在を正当化する理由があるとしても、それはメキシコ革命の目標自体を擁護するため党内で充分に意見がたたかわされるときのみであると確信している（p. 77）。

ところが、新しい版では党の果す役割を初版とは全くちがって理解し、それをメキシコの政治システムにおける必須のものととらえている。党は〝きわめて有効な選挙機関〟として活動してきたばかりではなく、政治的安定維持のための最重要機関となっている（p. 268）。〝これまで果してきた、また現在果している枢軸的役割を思えば、PRIをぬきにしてこの四〇年間の〝国民生活は考えられず、PRIが〝社会平和の維持〟のために果す役割はきわだっている（p. 287）。フェンテス・ディアスはPRIが〝一九一七年憲法が生んだ制度〟を支える能力を示してきたとも考える。時の政府とともに〝国家の進歩と独立〟の歩みを進めてきたのだから（p. 288）。結局著者にとって六〇年代のPRIは〝国全体の主要な勢力〟がその内部に結集しているから民主的なのである（p. 289）。党が継続的な自己改革を必要としていることは否定しないが、これまでにもそれを充分になしとげてきたといいたいのであろう。

**〝題名どおりには理論的でない〟**　エスクルディアの書物はここで扱う研究の中ではPRIを直接分析の対象とした唯一のものである。しかし、副題に〝理論的分析〟とあるにもかかわらず党のダイナミクスを――あるいは静力学でさえ――充分に説明してくれていない。ロペス・マテオス（López Mateos）政権の大統領府報道局長であった彼は、多様なカテゴリーに属する事柄をひとまとめに扱ってしまい、それらを分■しその間の関連を整理することができなくなっている。そのためわれわれはばくぜんとしたイメージを受けとるだけである。だが、いくつかの興味ある指摘を引きだすこともできる。たとえば、PRIの任務はメキシコ革命が掲げた目標を実現させることであり、そのためには〝メキシコ経済のインフラストラクチャーを根本的に変革〟せねばならないという（p. 51）。また、PRIの構造にも関心を寄せている。すなわち、三つのセクターから構成されているという構造上

てはほとんど何も知られていない。神秘のベールがPRIをつつんでいるのである。そこで次のような疑問が生じよう。なにゆえにメキシコ政治システムの最重要要素の一つについての調査が充分おこなわれてこなかったのか。この問いにたいして一応の説明はできよう。すなわち、内部にいてはじめて党をよく知りうるのであり（党内で活動した知識人が使うありふれた釈明であるが）、その他の方法でこの課題をやりとげることはほとんど不可能である。そして党を知る目的で党に加わるのはあまりにも高い代価を支払うことになると感じる社会科学者が当然いるであろう。政治家や活動家になれば往々にして客観的で厳正な立場を、とりわけいうべきことをいうための正当性を失ってしまい、自己に忠実でありえなくなるのではないか、と考えるのである。また、党に加入することと自体が知りえたことを思うまゝに発表しないという誓約をかわすことになるのだと考える社会科学者もいるのであろう。そうすれば党派的規律にふれる危険があるのは最初から分っているのであるから。

党を害するためではなくただその理解だけを目的とした調査・研究でさえ組織的に拒否する何かが党内にあるにちがいない。メキシコ人社会科学者にたいして党の扉はほとんど閉じられている。ところがメキシコ人以外には明らかにそれが開かれていて、ロレンソ・メイェルがすでにふれたように多くの外国人研究者が党内にもぐり込んでいる。もっとも、このばあいでも普通は外観をのぞかせるだけだが。おそらくこういった理由で、PRIを客観的分析の対象にしようとする意欲が時とともにうすめられ、PRIをとりまく神話と神秘のベールのみがふくらんできたのだろう。〝小数法則〟が事態をよく説明するように思える。つまり、党システムのカラクリについての知識が少なければ少ないほど、そのシステムの効率は高い。あるいは――全く同じことではないが――カラクリについての知識がふえればふえるほどシステムの脆弱性が増す。

**〝論評の方法について〟**　PRIに関する研究がいかにとぼしいといえ、ここでそれらに論評を加えることに意味がないわけではない。まず論評の対象となる研究を選んだ際の三つの基準を、いささか恣意的なのは承知のうえで、示そう。(a)公刊された研究だけをとりあげる。厳格な批判よりも礼讃に終始しがちな職業上の論文――決して多くはなく、政界に出ようとするものの手になるのだが――はふくまれない。(b)PRI自体の編集になる書物はとりあげない。その大部分が政策の表明や演説であって、分析や議論のかわりに美辞麗句を並べているにすぎないからである。(c)メキシコの政治システムと社会生活におけるPRIの役割を扱った研究を中心とする。

以上の基準から――やゝ独断的だが方法論的に大きなマイナスはなかろう――ここで扱う研究を挙げると次の数冊にしぼられる。Vicente Fuentes Días: Los partidos políticos en México (Altiplano, 1956 y 1969), Mario Escurdia: Analisis teórico del PRI (B. Costa Amic, 1968), Manuel Moreno Sánchez: Crisis política de México (Extemporaneos, 1970), Berta Lerner: "Partido Revolucionario Institucional" (en Antonio Delhumeau, Comp.: México, realidad poiitica de México, Instituto de Estutios Politicos, 1970), Pablo Gonzalez Casanoua: "El Estado y los partidos de México"[注]　著者の経歴も視点もちがった質の著作をまとめて扱うことになろう。著者の中には、自らの夢を社会の中で実現するために政界に出ようと考えているもの、政治家を一時やめて次の機会を待っているもの、一貫して学界に身を置いているもののそれぞれが含まれる。彼らはPRIについてわれわれに何を語ってくれるであろうか。

# 党の内外から——メキシコ人研究者の見たＰＲＩ——

ホセ・ルイス・レイナ

〝神秘のベール〟　〝公党〟が結成されてから五〇年経過しているにもかかわらず、党についての研究がほんのわずかしかなされてこなかったことに大いに注意してほしい。メキシコの社会科学者はメキシコ社会に負債があるといえる。党がいかなる機能を果しているのか、どの社会勢力といかなる利害関係にあるのか、あるいは、どの勢力と提携し、どの勢力に従属し、どの勢力から独立しているのか、これらの問題について今日まで体系的で説得力のある研究は全くなかったのである。

メキシコの国民生活に関心を抱くものなら誰もが〝公党〟はいかなる政治的役割を果しているのかと、これまでいくども問いもし問われもしてきたが、残念なことに抽象的で内容の乏しい回答を出すことしかできなかったようである。ＰＲＩ——それは政府与党の窮極的発展形態であるが——を詳細に研究したものとなるといよいよ少ない。ＰＲＩの前・前身であるＰＮＲ (Partido Nacional Revolucionario) については充分に知られているし、前身であるＰＲＭ (Partido de la Reuolucion Mexicana) についてもある程度知られている。しかしＰＲＩについ

ンス理論のたすけをかりてロペス・マテオス（Lopez Mateos）政権の利潤分配政策を分析し、メキシコにおける政策決定過程を明らかにすることであった。そこでは、権力のトップに焦点をあてるという研究方法のためもあって、「公党」は、たとえ紛争調停能力をもつとはいえ、政策決定においても利益集約においても重要な役割を果すとは考えられていない。リンス―カウフマン・パーセルの図式における中心変数は大統領である。党は完全に行政府に従属しており、システムの周辺に位置する。活動的メンバーを集め選挙民を組織するという能力では劣っているにもかかわらず、最も否定的な側面で北アメリカの政党に似た組織である。結局、政治システムの権威主義的性格は近い将来変りそうにないし、まして「公党」がその変化の原動力には決してなりえないと彼女は考えた。

**〝一九六八年―ユートピアの崩壊〟**　ＰＲＩにたいする北アメリカ人の見方は今では完全に変っている。ＰＲＩがメキシコの政治のなかで中心的役割を果しているという楽観的研究が一九五〇年代末から六〇年代末まで支配的であった。ブランデンバーグは例外だったのである。「公党」が主な役割を果しているという考え方は、政治システムの非民主的側面が過渡的なものであるという判断と結びついていた。経済の近代化――これ自身は否定しがたい現象のように思われていた――が早晩大きな社会的変化・文化的変容をもたらし、その結果メキシコは民主主義に向うと考えられていたのである。一九六八年の危機が、多くのメキシコ人にたいしてもそうであったように、北アメリカ人研究者の態度を変えるのに決定的役割を果したように思える。ニードラーだけが古い図式にしがみついていたが、もはや彼の主張は大した影響力をもたなかった。かわりにハンセンの著作は〝混血〟という人種的要因をもちこむなど歓迎されるとはいえない手法を用いてはいたが、出版されるや否や直ちにスペイン語に翻訳され、メキシコで大きな関心をもって読まれた。彼の業績によりメキシコの政治システムの権威主義的側面を強調する新しい波が高まり、ＰＲＩの役割が考え直されはじめた。「公党」の役割にたいする評価は低下し、政治発展についての楽観的見方は捨てられ、ついにメキシコ政治の将来をうらなう診断書から民主主義という字句が姿を消すのである。

**〝石油による改革〟**　もっとも、このような悲観的見解は石油ブームがおとずれる以前のメキシコについてのものである。再び石油の大量輸出国に立ち戻るのだとの決定がなされ、他方では政治改革が進められるという近年の劇的変化は未だ北アメリカ人の研究のなかに充分とり入れられていない。しかし、疑問の余地のないことが一つある。ブラボー川の向う岸の研究者がわが国の政治にたいしていだく関心は近い将来増すことはあっても減ることはなかろう。彼らは多様な見解を次々に打出してくるであろう。隣国の学界は、イランでの苦い経験をくりかえさないために、可能なかぎりのことを試みるであろう。不意をつかれるのをなんとか避けようとするであろう。われわれの政治の将来がどのようなものであれ、われわれを注視している北アメリカがそこに存在すること、これだけは確かである。そして、ＰＲＩが存続するかぎり――その大統領は二一世紀にむけて準備をととのえるべく党員に注意をうながしたばかりだが――北アメリカ人はＰＲＩの〝実体〟をえぐりつづけるにちがいない。

い批判を捨ててもいない。経済成長の果実の分配は、同レベルの成長を示しているラテン・アメリカの他の国々にくらべて――その国々はメキシコのように〝社会革命〟をなしとげたことを誇りにしているわけではない――とりわけではないにしても同程度には不平等である。メキシコ〝革命〟は〝社会的公正〟という点で大きな進展があったことを意味するものではない。一方ではメキシコ経済の社会的不公正を放置したままの資本主義的近代化、他方では政治的安定、この二つをうまく両立させる政治制度を創出したことを意味するにすぎない。一九四〇年以来革命の成果が都市・農村の労働者という党の多数派セクターにほんのわずかしか分配されていないことから、ハンセンはPRIを革命派閥連合が自らの利益を追求してメキシコの政治経済をコントロールするためのメカニズムだと定義したのである。PRIは三つのセクターの要求を代表し補完しているというスコットの見解はこれまでの事実によって裏づけられたものではなかったのである。

ハンセンはPRIの抑圧的存在によって統御されているかぎりメキシコの政治システムが民主主義的性格をもつにいたるとは考えられないとする。全ての経済プロジェクトがその可能性とは逆の方向で立案されている。PRIは表向きは〝革命〟の目的を完遂する役割を担っているが、別のかくされた機能をも果している。抑圧的で非民主的機能、不公正な分配を維持するという機能の方が実際には支配的であり、表向きの目標の成就をさまたげている。ハンセンの指摘するメキシコの政治システムの性格は、メキシコ人研究者には以前から明らかであったが、この時期になってはじめて北アメリカの一部の研究者がそれを重視するようになったのである。ハンセンは、仮にPRIが変るとしてもその変化は党内部から生まれるわけではなく、都市中産階級あるいは農民の不満から、いいかえれば現在の安定が崩壊するところに生じるだろうと考えた。もっとも、一九六八年事件にもかかわらず、結局彼はこの可能性を疑っており、逆のことを予測している。すなわち、メキシコの政治エリートのたくみな〝現実主義〟はPRIを含む政治システムをこれまでと大差のない状態にとどめておくであろう。自らと農業工業エリートの利益のために大衆を支配しつづけながら。

**〝権威主義的制約のもとでの多元主義〟**　一九七四年にスティーブンス（Evelyn Stevens）がProtest and Response in Mexico（MIT, 1974）を出し、その中で一九五八―五九年の鉄道労働者の運動、一九六四―六五年の医者の運動、一九六八年の学生運動を扱い、これら三つの抵抗運動がメキシコの政治システム全体にどのようなかかわりをもったかを分析した。スーザン・カウフマンの前例同様、スティーブンスもフアン・リンス（Juan Linz）の定義――構造的に制約された多元主義――にしたがって、メキシコの政治システムは権威主義的であるという前提から分析をはじめている。スティーブンスの研究が有名なのは壁の高さのゆえでなく――欠点が多いことでもよく知られている――権威主義に焦点を合わせたことによる。すなわち、PRIの役割はきわめて小さく、システムの抑圧作用は大きい。メキシコの政治が序々に民主化される可能性はほとんどなく、むしろ逆の傾向がみられる、としたのである。

リンスの権威主義理論を体系的に援用したのはスーザン・カウフマン・パーセル（Susan Kaufman Purcell）の学位論文（一九七〇年）がはじめてである。これが一九七五年に The Mexican Profit-Sharing Decision: politics in an authoritarian regime（U. of California P., 1975）として出版された。彼女の研究の目的はリ

PRIについても従来正統とされてきた見方を出ていない。今回メキシコの政治システムは〝単一支配政党〟システムと定義された。党は経済的変化にともなう摩擦を最小限におさえて紛争をコントロールする役割を果している。その三つのセクターを通してメキシコ社会の主要利益を統合している。PRIの政策は三セクターの幹部、有力政治家、企業界代表それぞれの意見が調整された結果うちだされるものである。この間に腐敗の要素が存在するが、それは多かれ少なかれ一つの政治システムがより秩序ある安定したものにむかう過程においてはめずらしい現象ではない（たとえば一七世紀のイギリスや一九世紀のアメリカ合州国がそうであった）。ニードラーはメキシコの政治システムが過渡期にあるというスコットのテーゼを支持したわけである。メキシコが民主的で発展した社会にいたった時――これが支配グループのかかげる目標である――PRIは姿を消すであろう。そしてそのことがメキシコの〝成功〟の証左となるであろう。一九五九年にスコットがたてた命題は一九七一年にいたってもなおニードラーにとっては有効なのであった。

**〝夢の終り〟**　北アメリカの学界がメキシコの政治過程とその「公党」を好意的・楽観的に見た時代はニードラーでもって終る。同じ年にハンセン（Roger D. Hansen）の The Politics of Mexican Development (Johns Hopkins, 1971) とジョンソン（Kenneth F. Johnson）の Mexican Democracy: a critical view (Holt, 1971) が刊行されそれまでの見方をくつがえした。この頃までに北アメリカではラテン・アメリカに別のキューバが生れるのではないかという危惧は消えており、それだけメキシコをキューバにかわるモデルとして見る必要性が少なくなっていた。また一九六八年事件の結果、外国人研究者はメキシコ政治に関する従来の分析を修正せざるをえなくなっていた。

**〝民主主義の秘儀〟**　ジョンソンの研究はそれまでのものにくらべると専門的、体系的であるとはいえないが、反面きびしい批判に満ちている。メキシコ内務省が彼を国外追放にしたほどである。ジョンソン（バジェットの弟子であるが）にとってメキシコの政治は〝密教民主主義〟ともよぶべきものであり、おどろくばかりの腐敗にみち、そこでは何もかもが売買の対象になる。彼は〝集団〟を分析の基礎におくが、このばあいの集団は党の三セクターを支える公式のものではなく、党内の、あるいは有力な政治家を中心としたクリケ、カマリーヤとよばれる非公式集団である。実質的意味のある政治闘争はこれらの派閥――多数者の利益がここに代表されているというわけではない――の間に生じ、その他の勢力はこの派閥につながってくる。ジョンソンによれば、カルロス・マドラソ（Carlos Madrazo）による党改革の失敗と一九六八年事件こそ、PRI体制がもはや主要な政治運動家、政治勢力の全てを体制内に吸収できなくなっていること、もしくは吸収することを肯んじなくなっていることを示している。すなわちPRI体制崩壊の徴候であった。一九六八年事件はまたPRIから疎外されたグループが強化されつつあったことをも示している。反対勢力強化の主たる原因は支配勢力が当初よりかかげてきた社会的公正という目標が全く達成されてこなかったことにある。そのため体制の正当性の基盤は著しく侵食されていた。メキシコの政治システムの将来はうらやむにたるものではなく、発展途上国のモデルとなりうるようなものでは決してない。ジョンソンはそう結論する。

**〝革命から派閥連合へ〟**　ハンセンの研究はジョンソンのものよりはるかに学問的・体系的であるうえ、きびし

表されたのは、ラテン・アメリカにおける、また第三世界一般における社会主義との闘いをめぐって北アメリカで議論が沸騰していた時であった。〝進歩のための同盟〟の黄金時代であり、〝メキシコ・モデル〟にたいするブランデンバーグの支援はそれ以前の研究者にもまして熱狂的であったといえよう。彼の現実主義的な見方からすれば、メキシコ〝革命一家〟の大義はラテン・アメリカだけでなく全発展途上国の手本であった。ブランデンバーグは民主主義のいかなる幻想にもおちいらなかった。メキシコの〝自由主義的マキャベリズム〟は真の政党制になじまない。権威主義は歴史の中にしっかり根を下しており、この現実は予測しうる将来あらためられそうにない。しかし、低開発を克服するための国民的努力が展開されるなかで、メキシコの政治エリートは政治権力の独占と個人の自由の尊重とをうまくかみ合わせてきたとする。

PRIに関してはスコットの見解にはっきり反対しており、クラインの考え方ともちがっている。すなわち、政策決定は党内で行なわれているのではない。それは〝革命一家〟という小さな仲間うち（大統領、主要閣僚、地方有力者、若干の労働運動幹部、巨大経済団体のトップ）の排他的特権に属する。ブランデンバーグ流の図式では、党の幹部は権力の階層の第二のレベルを占めるにすぎず、明らかにより上級の権力に服従しているのである。党そのものは決定された政策を実行にうつすための装置でしかなく、連邦・地方の官僚機構、軍部、弱小政党とともに第三のレベルに位置する。結局彼の考えでは、PRIは政策決定にたいし何らの影響をも与えておらず〝革命一家〟の行動を正当化する儀式の中でささやかな役割――必要ではあるが――を果しているにすぎない。

〝放蕩息子の帰還〟　論争は表面化した。一九六六年パジェット（Vincent Padgett）が The Mexican Political System（Houghton Mifflin, 1966）を出し、「公党」の役割にたいする評価を回復しようとしたのである。メキシコの政治システムの特徴はその安定性にあるとパジェットは考えた。この命題を、メキシコの政治文化の特質、そのもとで政治システムに与えられている正当性、圧倒的に優勢な「公党」の存在、要求を有効に伝達しうるインタレスト・グループの能力、行政権力の強大さ、国民の多数に利益をもたらしている開発政策の存在、などによって説明した。こうしてPRIは大統領、インタレスト・グループと並んで再び最上位におかれることになった。

パジェットの分析はスコットのもの同様機能主義理論の固い枠を一歩も出ていない。政治システムの核心にある〝大統領すじ〟の意向に服従しているにもかかわらず、党は行政府の単なる付属物ではなく利益集約のための欠くべからざる機構であるとされる。すなわち、PRIは利益集約装置、コミュニケーション回路、紛争調停者の役割を果し、さらに宣伝・選挙担当部局を通じて国民のコンセンサスを高めシステムにたいする正当性をとりつけている。パジェットにとってPRIはメキシコの政治システムの中心部であり、将来その自立性を高めうるものであった。安定を維持することと個人の自由を制限せずに国民の多数のための社会改革を進めること、メキシコの政治システムはこの二つを同時に可能にしている。こう考えるパジェットはそれまでの研究者と同様将来を楽観視していたといえる。

〝いつまでもこのままでいない〟　一九七一年ニューメキシコ大学のニードラー（Martin Needler）が Politics and Society in Mexico（U. of New Mexico P., 1971）をあらわした。メキシコの政治システムが危機的状況におちいっていることがすでに明らかであったにもかかわらず、ニードラの分析は政治システム一般についても、

まで楽観主義者であったスコットは、メキシコの政治システムは過渡的状態にあり、この時期は急速に過ぎつつあるとした。メキシコの政治システムは〝非西欧的〟な――いいかえれば伝統的な――ものから〝西欧的〟なものに、本質的に先進資本主義諸国の政治システムに似たものに比較的短時日のうちに移行すると考えたのである。彼は近代化論者に共通してみられる仮説にたってインタレスト・クループに焦点をあてる。すなわち、第二次大戦後のメキシコの経済成長はインタレスト・クループの分化増殖をうながし、大統領とPRIが従来もっていた支配力を低下させるというのである。大統領はもはや過去におけるような専制的な役割を果しておらず、基本的にはPRI内外の利益対立の調停者である。しかも、主要な利益対立と政策決定はPRIを通して行われている。スコットは、PRI内部で底辺からの圧力が増しているから、それだけ政策決定への参加もふくらむだろうと考えた。民主化の流れは停滞していないと思ったのである。多元的利益の存在、そして都市――メキシコにおいてもっとも近代的で〝西欧化〟した地域――における反対諸党の相対的な強さは中期的にみて真の二大政党制に向わせる力となろう。その結果生まれる反対政党はPRIと同種のものになるにちがいない。なぜなら、PRIに対抗するため多階級的、非イデオロギー的になるだろうから。こうしてスコットが中期的に予測したのは、経済的近代化の結果として北アメリカとよく似た政党システムが生まれるということであった。資本主義的近代化が進めば進むほど旧来の権威主義は時代おくれとなり、メキシコの政治システムは今日西欧にみられる自由主義的多元主義に近づく。この結論はまさしく楽観的な機能主義的近代化論から必然的に導き出されるものであった。

**〝メキシコは実験室である〟**　キューバ革命が成功しそれが急進化することによって、メキシコにたいする北アメリカの関心は高まった。時をおかずメキシコは社会主義キューバにかわる選択肢として描きだされたのである。一九六〇年末には北アメリカ学界の有力な〝メヒカニスタ〟の一人であるクライン（Howard Cline）が三年後に Mexico, Rovolution to Evolution (Oxford U. P., 1963) として刊行されることになる研究を完成させていた。その中でクラインは、語義上の矛盾をさして気にとめず、メキシコの政治体制を〝単一政党による民主主義〟とよんだ。PRIは政治システムの中核にあるとともに、内部に異質なクループを含んでいよいよ複雑な構成になっている。各クループ間の調整は常に行なわれており、指導者もまた現実的な適応能力をもっている。このシステムは、メキシコ全体の社会階層、政治勢力を代表して党内に集約される各利益によく対応できるのではないか。クラインはそう判断したのである。彼にとって民主主義とは党内における各種利益の複雑な対立とその調整のことであった。避けがたい内部分裂、そこから生まれる複数政党システムなどに言及する必要を全く感じていない。「公党」による政治権力の独占がある期間続いていることは認めるが、それだからといって党内に現実的で効果のある民主主義の一形態がないわけではないと考えたのであり、しかも彼にとってはそのことだけで充分だったのである。

**〝マキャベリのいたずら〟**　一九六四年にブランデンベーグ（Frank Brandenburg）の The Making of Modern Mexico (Prentice Hall, 1964) が刊行された。ブランデベーグは学者としてだけでなくメキシコに利害関係をもつ北アメリカ企業の顧問としてもこの国を熟知していた。一〇年にわたるメキシコ生活ののちに生まれた彼の研究は、一九一〇年革命の原因と結果を長期的視野のうちにとらえようとするものであった。精緻な理論のかわりに直接観察から得た多くの仮定に基づいたものであり、当時の一般的感情を抑制してもいない。彼の書物が発

社会科学理論に少なからぬ影響を与えようとしている時）、それぞれの研究者がメキシコ社会のいかなる局面をどのような問題意識のもとにいかなる方法で分析しているのかを、いいかえれば、彼らの研究のレベルを大ざっぱにではあるが手近に知ることができるとすれば若干の意味があろう。本号の二つの論文はメキシコの政治システムの中核にある制度的革命党についての研究状況を――必らずしも全般にわたってはおらず、総合雑誌に発表されたものであるためややジャーナリスティックであるが――まとめたものであり、そのうちの一つはこれからの投稿のなかでは例外的に北アメリカ人の研究を独立させて扱っている。北アメリカ研究者の業績を全くぬきにしてメキシコ研究はありえない現状であるから、とりあげられた文献はわれわれにもなじみのあるものであるが、メキシコ人自身がそれらをどうみているのかは興味のあるところだろう。できれば本シリーズの最後にラテン・アメリカの社会科学全般をみわたした論文を掲載したいと考えている）

# 楽観から懐疑へ
## ――北アメリカ研究者の見たＰＲＩ――

ロレンソ・メイエル

メキシコとその政治的変遷はこれまで長い間北アメリカ研究者の好寄心と研究の対象になってきた。とくに一九一〇年の革命以後この傾向は著しい。メキシコ革命に関して最初にあらわれた体系的・学問的分析の多くが、クラーク、シンプソン、タンネンバウムの著作が示しているように、北アメリカ人の手になるものであった。そののちも隣国の教授や博士候補生は大量の著書、論文を雨あられのごとくわれわれにあびせかけてきた。六〇年代の一時期、メキシコについての社会科学的研究は北アメリカ人以外には立入禁止区域であるようにさえ思われた。バランスがわれわれの方に傾きはじめたのは最近のことである。それも、彼らの研究活動が下火になったからではなく、われわれの研究が盛んになったからである。そして今日また、石油資源の重要性のために、メキシコはブラボー川のむこう岸の社会学者、政治学者、経済学者によって切りきざまれようとしている。このような事態にわれわれがいらだちをおぼえるのは当然である。しかし、手をつくねて見まもっているばかりでなく、それをわれわれにたいする挑戦として積極的に受けとめるべきであろう。今、彼らの研究を総括してみることが有益である。

メキシコ革命後北アメリカ研究者の注意をひいた現象の一つが、他のラテン・アメリカ諸国とは対照的にメキシコの政治システムが維持してきた安定性であったことは疑いない。この安定性の謎をとく鍵が、彼らの多数見解によれば、「公党」(el partido oficial) と通称されるＰＲＩ (Partido Revolucionario Institucional, 制度的革命党) である。ここからＰＲＩの研究に関心が集中した。以下、北アメリカの代表的研究者をとりあげ、彼らの考え方の枠組とその変化を見てみよう。

### 〝昔々あるところに政党がありました〟

上に述べた多数見解の基調を布いたのがイリノイ大学政治学教授スコット (Robert E. Scott) の著書、Mexican Government in Transition (U. of Illinois P., 1959) である。あく

審判機関の保護に値する信頼をより容易に認めうるように思われる。もっとも、行審法（一四条）のもとでは実際にはほとんど不服申立権の失効の余地はないように思われるが、西ドイツ行政裁判所法のもとではその余地がある。Vgl. Viefhues, NJW 1975 S. 626.

（3）判例時報八八八号一一六頁の解説部分を参照。

（4）この判例については、南・前掲論文二九頁以下参照。

# PRI研究について

## 楽観主義から懐疑へ—北アメリカ研究者の見たPRI—

## 党の内外から—メキシコ人研究者の見たPRI—

ロレンソ・メイエル
ホセ・ルイス・レイナ

（「第三世界と世界政治」研究会資料（五）・訳、ギエルモ・クアルトゥチ、蔵重　毅）

〈研究会から〉　これから数回にわたってメキシコにおける社会科学の発達とその現状を紹介する論文の投稿を受けたいと思う。全てメキシコで最近刊行されたものである。そのなかには特定の対象をめぐる代表的研究をとりあげて批判するとともに、その対象自体に接近しようとするものもあれば（たとえば本号の論文）、メキシコにおける政治学、メキシコにおける社会学といったようにとりあげる文献を特定の対象を扱ったものに限定せず社会科学の各分野での活動を俯瞰しようとするものもある。もっとも、社会科学における方法論と研究の対象とは密接な関係にあり、たとえ〝文献解題〟でおさめようとしてもそれぞれの文献が扱う対象に言及せずにはおれないから、両者の相違は力点のおき方にある。いずれにしても、わが国のラテン・アメリカ研究が——したがってメキシコ研究も——ようやく盛んになろうとしている時（我田引水的に言えば、世界各地でのラテン・アメリカ研究から生まれたモデルが既成の楽観から懐疑へ——北アメ究リカ研者の見たPII——